



日独交流150周年
Jahre Freundschaft
Deutschland – Japan

伴野外務副大臣

林横浜市長

近藤文化庁長官

ドイツ学園の生徒、先生、保護者の皆様

横浜市民並びに東京都民の皆様

友人の皆様

150年前のちょうど今頃、今日の東京湾、当時の江戸湾に、プロイセンからやってきた小ぶりの艦船が三隻投錨していました。小規模な代表団が、修好通商条約締結にむけ交渉を行うために来航し、1861年1月には、当時の徳川幕府との間で条約が締結されました。

本日は、徳川恒孝様と安藤綾信様にご来賓としておいでいただき、大変嬉しく存じます。お二人はそれぞれ当時の将軍家並びに、宰相・外務大臣役であった老中の末裔でいらっしゃいます。

その後数十年にわたり、明治の日本から多数の学問を志す若者たち、医学や研究に携わる人々、陸海軍の士官候補の人々がドイツ帝国において学問・研究にいそしみ、あるいはまた、日本においてドイツ人の専門家や教育者の助言を受けました。

他の国と異なり、日独関係では、学術交流が当初から関係全体を先導してきました。学術が、信頼の基礎と互いへの敬意を醸成し、その土台の上に経済・政治協力を構築してきたのです。日本は、今日、私たちの最も緊密な友人に数えられ、多数の国際的枠組における政治的パートナーです。ヴェスターヴェレ外務大臣が今年はじめ、日本を大臣就任後のアジア訪問の最初の訪問地としたのも故なき

ことではありません。私たちは、両国の緊密な二国間関係、共通の価値と利害関心を基礎に、今後も、政治経済、教育、学術、市民社会の交流を一層強化していきたいと考えています。

日独間では、自治体の姉妹提携関係や交流関係が65以上、日本各地の日独協会は50団体以上を数えます。日独協会は、100年以上の歴史を誇る団体もあり、継続的な文化交流・友好関係増進を象徴する存在です。林横浜市長とともに、本日このドイツ学園における交流150周年オープニングに合わせ、横浜日独協会が設立されましたことへの喜びを分かち合いたいと思います。また、横浜市とフランクフルト市、さらには、ここ東京横浜ドイツ学園とベルリンのカール・ベツヒシュタイン・ギムナジウムの間それぞれ新たな交流関係がスタートしつつあることを大変嬉しく思います。これらは、交流150周年が、すでに準備の段階で民間交流の一層の進展を促す触媒役を果たしてきたことを示しています。

さて、教育・文化の分野では、日独の高等教育機関の間でわずか150年の間に極めて多数の協力が生まれ、現在は300件以上の提携交流が進められています。両国の学術交流のネットワークは大変密度の濃いものとなっています。ドイツ学術交流会（DAAD）とアレクサンダー・フォン・フンボルト財団により、毎年多数の日独の学生、研究者、芸術家が極めて質の高い交流を行う機会を得ています。すでにのべ約5000名の日本人が、両機関の招聘によりドイツに留学・研究滞在しており、毎年新たな招聘が行われています。私たちは、今回の150周年を契機として、先日設立された日独科学・イノベーションフォーラム等を通じ、新たなプロジェクトを提起し、大学における研究交流を一層拡充することを大きな目標として目指します。

ドイツ文化センター（ゲーテ・インスティトゥート）も素晴らしい活動を行っており、日独関係にとり極めて重要です。50年近く前に、日本で初めてのゲーテ・インスティトゥートが設立されました。今日では、東京、大阪、京都の三カ所で多数の行事を実施するとともに、モデルとなるような語学コースを展開し、ドイツの文化のあらゆる分野と活動を紹介しています。2011年には、交流150周年を機に、京都の文化センター施設を利用し「アーティスト・イン・レジデンス」を実施する予定です。

さて、東アジアにおいて最も長い歴史を誇るドイツ学校である東京横浜ドイツ学園の重要性についても述べたいと思います。創設から100年以上を経て、同学園は、出会い、異文化間交流、対話の場として定着しています。同様に、伝統ある神戸ドイツ学院やその他のパートナー校とともに、世界各地にあるドイツ語系教育機関のネットワークの一角を成しています。経済、政治、文化のどの分野でも、異文化体験をもつ次世代が必要とされています。

(伴野外務副大臣
林横浜市長
近藤文化庁長官
ドイツ学園の生徒、先生、保護者の皆様
横浜市民並びに東京都民の皆様
友人の皆様)

150年にわたる日独関係においては、これまで大変多くの成果が得られてきました。しかしながらあえて、両国の交流をより良いものにし、青少年にグローバルな可能性を与えていくには何をすればよいのか、問いたいと思います。

たとえば日独ワーキングホリデー・プログラムは、滞在費用を補うための付随的なアルバイトをしつつ相手国に滞在する機会を両国の若者たちに与えるものです。また、70年代はじめにスタートした日独スポーツ少年団同時交流事業は、相手国において文化、スポーツ、生活事情を体験する機会を提供しています。参加した青少年の数はすでにのべ1万名以上にのぼっており、各自忘れられない思い出を得てきました。同事業は、ドイツが実施するこの種の国際交流事業としては最大かつ最も成果の大きいものです。

勤労青年、職業訓練生の交流は、これまでより一層力を入れて取り組む必要があります。これに関し昨日、在日ドイツ商工会議所会頭と意見を交わす機会がありました。日本企業側からも、新たな推進力を加えていただければ、大変嬉しく思っております。たとえば、150周年の期間、あるいはそれを越えて、職業訓練やインターンの枠を新規に設けていただければ

ば、日独交流の記念すべき年を機に、今後の両国関係への持続的な効果をもたらされることになるでしょう。

「日独交流150周年」は、経済、学術、政治、文化の各分野の取組拡大に向け、協力して進める事業です。日本で予定されている主要行事については、シュタンツェル大使から説明がありましたが、未来志向の行事ばかりです。未来を見すえつつ、過去を振り返ると、150年間で構築されてきた成果の大きさは大変喜ばしいものです。

冒頭申し上げたとおり、150年前の今頃、江戸に到着したのは三隻の小ぶりの艦船でした。ひるがえって今日、両国の間では毎日最新の航空機が往復し、最近では超大型旅客機エアバスA380もこれに加わり、何千人もの人々が両国を行き来するようになっています。プロイセンの代表団は、よそ者としてやってきました。今日飛行機で日本に到着する人々の多くは、昔から日本に馴染みのある親日家です。

本日のオープニングにおける日独友好に向けた私たち参加者の喜びが、社会のあらゆる方面に広がることを願ってやみません。旧交を温め、新たな友情を結びつつ、交流150周年を祝う一日としていただければ幸いです。